

千々岳
山口
久



登りたい山があると、どのルートから登るのがいちばん愉しいかを、まず考える。山といえは頂上のことしか念頭になく、いちばん骨の折れない登り方で頂上に立って、頂上を踏めばそれでもうその山はおしまい、というような山登りは、どうも私の趣味ではない。登頂はもちろん山登りの重要な目的だが、それと同じくらいに、ときにはそれ以上に、そこに至るまでの過程が私には興味がある。ひとこと言えば、山を全体として見て、できるだけその山の固有のよさが味わえるような登り方をしたいということだ。

平ヶ岳は、恋ノ岐沢から登りたい、と昔から考えていた。いまのように多色刷りの二万五千分の一の地形図などまだ発行されておらず、黒一色の五万分の一の地形図しかなかったころ、その五万分の一の地形図で平ヶ岳を一瞥したときから、そう考えるようになった。平ヶ岳の北面には、只見川の支流に属する、中ノ岐川、二岐沢、恋ノ岐沢と、いずれも深そうな三本の谷があるが、恋ノ岐沢が本流を一本の長い軸として、すつきりと頂上付近に抜けあがっていて、登山路のない平ヶ岳の登路としては、この沢が

格好のルートになると思われた。

取りつくのが不便なために訪れる者の少なかった平ヶ岳も、その後、ダムによる奥只見湖の完成などにもなつて、登山路も開かれ、昔のように玄人向きの難しい山ではなくなつた。容易に登れるようになってしまえば、湿原のある美しい山頂にあこがれて、多くの登山者がやつて来るようになるに違いない。そうならないうちに、三人の仲間を誘つて出かけたのは、いまから十一年前の八月のことである。登路は、昔の初恋の操を守つて、やはり恋ノ岐沢とした。

恋ノ岐沢の印象をひとこと言えば、きれいな谷、というにつきる。この沢には、行く手を遮つて堂々と水を落とす大きな滝もなければ、泳がなければ渡れないような深い淵もない。そのかわり、小滝と釜がつきつきと現れて、すこしもだれるところがなく、まさに洗練された美溪と言つても過褒ではない。谷は明るく、鷹揚な感じがするが、はつらつとした元気さもある。磨かれてナメになつた岩盤の上を、水が喜ばしげに、ときには優美に姿態をくねらせて走っている。そのさまを眺めているだけでも

飽きることがない。兩岸が狭まってゴルジュになったところもあるが、規模は小さいので容易に通過できる。

長い沢なので、出合を朝出発したのだが途中でテントの一夜を過ごし、翌日、なおも小滝とナメと釜を連続させる沢を忠実につめて、高山植物の咲く源頭の草地に出、愉しかった恋ノ岐沢の溯行は終わった。そこから、池のある池ノ岳に登れば、平ヶ岳の頂上までは稜線を三十分たらずの距離。

平ヶ岳の頂上も、私の期待を裏切らなかつた。いや、期待以上だったといつてもいい。これまでに私が登った数多くの頂上のうちでも、平ヶ岳の頂上は、その特異な美しさで、すぐれた十指のなかにはいるだろう。小池の散在する高層湿原の頂上は、まことに「天上の楽園」と呼ぶにふさわしかった。その楽園にいるのは、われわれ四人だけなのも、ありがたかつた。

この美しい山が第二の尾瀬にならぬようにと、いま祈らずにはいられない。